The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	研究者のつぶやき ： 未来共生的なフィールドワーク？
Author(s)	澤村, 信英
Citation	未来共生学. 2015, 2, p. 348-351
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51809
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

研究者のつぶやき：未来共生的なフィールドワーク？

澤村 信英
大阪大学大学院人間科学研究科教授

フィールドワークを行うことが前提になっている研究領域は少なくない。私は30歳代半ばまでJICA（現国際協力機構）職員として働いており、それまでの調査といえば、プロジェクトの形成や実施、評価という具合に、常に援助との関わり合いの中で行ってきた。したがって、必要なデータは相手国政府のカウンターパート機関に依頼すれば、難なく入手することができた。現場を訪問して関係者に質問すれば、こちらが期待しているような回答が簡単に得られた。相手にしても、支援を得られるかもしれないという可能性や支援を得た結果として、積極的に協力をしてくれた。私にとっては、それが当然の相手（被援助者）側の責務であるとも考えられた。そして、調査報告書を書けば、JICA内部や外務省、関係省庁に対する説明資料として、それは不可欠なものであった。

それが30歳代後半で大学教員になり、アフリカでの教育研究を本格的に始めた。海外調査を行い論文のようなものを書いた時の印象は、「役に立たない」という感覚であった。別に誰かに依頼されて行った調査でもないので、それを必要としている具体的な読者はいない。研究とはそういうものだと慰めてくれる人もいたが、素直に納得できるものでもなかった。当然のことであるが、それまでのJICA時代にはあり得ないことである。おそらく、アフリカの教育に関心を持つ若い人は少なくないので、読んでくれる人はいるのだろう。仮にそうであるにしても、少なくとも現地の人々には裨益しない。JICAで働いていた時は、報告書や書類を作れば、それによりプロジェクトが動き出し、具体的な支援が始まるのである。目に見える短期的な成果をいつも確認することができた。

そんなことをモヤモヤと考えながら、教育開発研究に関心を持つ研究者や援助関係者8人が集まり2006年9月に「ケニア教育開発合宿」を行った。その報告書（澤村編、広島大学教育開発国際協力研究センター、2007年）の副題が「共生的フィールドワークを求めて」であることを今さらながら思い出した。そのはしがきに、私は次のように書いている。

> フィールドワークは現地で生活する人々からの支援なくして実施することは出来ないし、その方法によっては、人々の仕事や生活の妨げになる。研究者の場合、お世話になる人々やコミュニティの生活改善の手助けをすることもあまりできない。「共生的」フィールドワークと副題に掲げたのは、現地の人々と外部者である研究者・調査者の理想的な関係性がそのあたりに存在するのではないかと思えたからである。（i頁）

その当時の私には、「共生」という用語にそれほどの思い入れがあったわけではない。合宿参加者で議論した結果、暫定的に落ち着いたのが「共生的フィールドワーク」であった。具体的なイメージがそれほどあったわけではないが、「データの略奪」ではないと公言できるほど、自分が行う研究が人々に役立っているとは、到底思えなかった。共生とは程遠く、利益を得るのが研究者だけで、相手の生活や仕事の時間を奪うのであれば、「寄生」になってしまう。研究をしていても苦境にある人々の生活改善に、直接的にはほとんど貢献できないのである。だから、そのようなフィールドワークを理想として「求めて」いたのである。まさに、「未来共生」的なフィールドワークを探していたのである。

そのあたりの研究者としての「寄生」的感覚は、今もってなくなることはない。最近上梓した拙編著『アフリカの生活世界と学校教育』(明石書店、2014年)のあとがきには、そのモヤモヤ感が再び表出している。その中では、研究者の援助機関関係者に比べた優位性について、「思い当ることは、現地滞在中に比較的自由に時間を使うことができ、現地の人びとと好きなだけ交流することができ、フィールドと長期にわたり関わることができることである」(268頁)と記述している。援助機関関係者が調査対象地を「フィールド」と呼んでいるのを聞いたことがない。その言葉には「野外」と「学問的な専門分野」という意味が重なり、研究者ならではの地域との深い関わりの中で醸成される愛情と敬意が含まれているからだと思う。

フィールドで出会う人々は本当に親切である。特に年配のお母さん方はそうである。私のこれまでの研究も、彼女たちの支援がなければ、これだけ実り多く、楽しくできたとは思えない。私の発するおやじギャグを心底笑ってくれるのも彼女たちである。そして、家族の生活を思い、あるいは自身が学校へ行く機会を得られなかったからこそ、子どもにだけは同じ経験をさせたくないと、少しでも良い学校に就学させようとする母親にたくさん会った。

研究者になる前、JICAで出張していた時は、新しい場所、新しい国へ行きたかった。そのような国へ行っても、現地事務所の便宜供与があり、心配することはほとんどない。ただ、大学に来てからは、すべて自分でやらなければならないが、同じ場所に何度も行くことが楽しくなった。その理由は、現地の人々と個人的な付き合いができるからである。JICA時代にも現地ですばらしい方々にたくさん出会ったが、その関係は組織的なつながりであり、相手にとっても援助機関であるJICAの職員である私に関心があっただけである。その点、研究者が相手の役に短期的に立つことはほとんどないが、個人的にはとても居心地がいい。それに、研究者は自分の意思でフィールドにいつでも戻って来られるのである。

この感覚はなんなのであろうか。JICAで働いていた時には感じたことがない安堵感がある。少なくとも、支援者と被支援者の関係ではなくなった。それでも収入などの経済的安定度は、アフリカの草の根の人々とは比較しようもないほどの差がある。それに大学教員であるから相手の人はある程度信頼してくれ丁重に扱ってもくれる。さらに、日本人としては、日本製の自動車や電気製品のおかげもあるかもしれない。このような自分の恵まれた立ち位置を考えながら、将来に向けて共生のあり方を問い続ける研究者の姿勢と心情こそが、未来共生的なフィールドワークにつながっていくように思える。